

福岡・大牟田の社会連帯・若者支援

「地域助け愛隊」結成

「人が苦手」でも出来る 生活支援の仕事

大牟田事業所とは兄妹の関係にある地域福祉事業所「海の風」。
ここでも若者が働き始めました。武元春美所長が引きこもりがちの
若者たち3人と「地域助け愛隊」を結成。8月から一人暮らしの
高齢者宅の清掃や管理、草むしりと、人に寄り添う仕事をはじめた
のです。

大牟田地福「海の風」

「指名もあり」

9月28日、まだ暑さが残る大きな一軒家で、草むしりが始まりました。今日は、若者2人と武元所長、濱崎康徳九州事業本部副本部長の「地域助け愛隊」の面々です。30分、大きな草がなくなり、掘り返した土の匂いが強くなりました。小

一時間で、すっかりきれいになりました。この2階建ての一軒家は、高齢者の一人暮らしで、海の風がケアに入っていました。が、入院。家族から「海の風なら、安心できる」と家の管理も頼まれました。

「地域助け愛隊」の最初の仕事は、ケアマネジャーから頼まれたAさん宅の片付け。Aさんは、作業の様子をじっと見ていて、あたしの言うとおりにして」と何度も手直しを指示されましたが、一生懸命汗を流す姿に「毎週来て」の依頼に変わって、あの子に来て欲しい」と指名もかかるようになった。

入院中の人から「ケアマネジャーから紹介された。退院するの。家の清掃を」

「センター事業所は、なんでこんなに若い人が次々に入ってくるんですか」と、病院や周辺の人が聞かれることもあった。

「ヘルパーには、頼めないことがたくさんあるんだ」との話を聞きました。

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、



後列左から濱崎副本部長、武元所長と「地域助け愛隊」の若者2人

わたるくんは、「中学生の頃から、学校へ行くのは嫌になった。それから家の中にいることが多かった。あんまり話さなないの。人が相手の仕事は、黙々とやる仕事がいい。」

ひろくんは、中学生の頃から学校へ行かなくなり、家で荷物運びや鉄骨組みをやり、コンビニでアルバイト。高齢者の方と接するのは好きですが、しゃべることが苦手で、黙って仕事をするのが好きです。

この2人に武元所長の息子の3人の若者が「地域助け愛隊」のメンバーです。

武元所長の息子もコンビニのアルバイト、小学校の時の友達もぶらぶらしている、スタッフの子ももひきこもりがち。半ブー(半分ブータロ)3人で一緒に仕事したらどうか、生活支援ならできそうだと、武元所長が

若者に声をかけ、事業所の仲間思いを伝えたいことでした。

事業所のみんなも「生活支援」のチラシをつくって、利用者宅や近所にポスティングしたり、ケアマネジャーにも声をかけたりして広げ、ケアワ



若者が「黙って仕事をする方がいい」という。2人は、武元さんと一緒に汗を流した

「社会の課題に真面向から挑む事業を九州の雇用・失業問題に「深刻」を通過して「破壊的で悲惨な状況」に陥っている。今必要なのは、論議するだけでなく、具体的に

の展望と希望を紡ぐ取り組みだ。労働の「協が、必要だ」と思う。

「社会の課題に真面向から挑む運動を展開しなければならぬ。」

センター・九州事業本部 本部長 平本哲男

経営もみんなで支え合う

「センター事業所は、なんでこんなに若い人が次々に入ってくるんですか」と、病院や周辺の人が聞かれることもあった。

「ヘルパーには、頼めないことがたくさんあるんだ」との話を聞きました。

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

「ヘルパー3人が、助け愛隊を結成することになったのは、

人と人の絆を結び成長支える「現場力」

福岡・大牟田事業所

15人の若者と向きあい 互いに学んだ清掃現場



守山君(左)の指導でガラス清掃もどうにかできるように

挨拶できない、黙る、下からにらむ若者―「これは事業所が試されようよ」

時間がかかっても人は変わる

三井三池炭鉱が閉山し、最盛期21万人の人口が半減した福岡県大牟田市。正規雇用はほとんどなく、若者は派遣労働がサレテ業がほとんど。その中で、高卒の若者や障がいをもつ若者を多数受け入れている労協センター事業団大牟田事業所(米の山病院現場など)と地域福祉事業所「海の風」の若者の仕事と生き方を試行錯誤しながら支える中で、組合員も共に学び成長。さらに、地域にこだわって、社会連携活動から仕事おこしを展望する取り組みも広がっています。9月28日、2つの現場を訪ねました。(本紙 川地)

所長 もうどげんもできん

「印刷会社を6カ月前にできるからさうかわで辞めさせられたんですけど、なんとかお願いできないでしょうか」と、高校の先生に連れられて米の山病院の清掃現場に、A君が来ました。黙って座るだけのA君を見て、新本ハルヨ所長は「果たして一人

それまでも、若者を受け入れてきた経験を持つ現場なので、みんなから話合って、翌日から、現場責任者の蓮尾美恵子さんが指導



前列左から坂口、松藤、現場責任者の蓮尾、新本所長、守山。後列左から鋤田、金光、松尾、大塚の大牟田事業所のみなさん

組合員の信頼を土台に

半年後、エレベーター前で米の山病院の橋口院長から、「A君、よく挨拶できるようになったね」と声をかけられました。蓮尾さんが「A君よかったね」と言うと、二ターツと笑いました。終れてこの話をする

「今考えて、A君が黙っていたのも、仕事の時にふっとペラッダに出て行ったのも、あの子の優しさやなかつたかと思えます」と蓮尾さん。

「どうしてや」と聞くとい、誰か気にしてくれん、ひりひりして好き勝手な過剰な返事。鬼にならないう、この子に教えられるな」と蓮尾さん。

「おはようございます」「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

大きかった病院の支え

米の山病院の清掃業務を23年間続けてきた大牟田事業所は、しっかりと仕事をこなし、病院の信頼にも応えてきました。しかし、現場の高齢化もあり、事業所をどう継続させるかが課題になっていた。今では、10代から20代の若者が7人もいる現場に変わりました。

6年前の夏、地元高校の先生の依頼で、はじめて高卒の若者を受け入れた時、現場では「若い子が清掃で食っていけない、すぐ辞めるんやなかね」と不信がありました。しかし、はじめて受け入れた高卒女性2人が、先輩の言うことを「はいっ」と素直に受け止めて、毎日一生懸命汗を流す姿に、みんなの不信は消えていきま

「朝の挨拶が気持ちがいいね」「おにぎりもってきたから食べよう」とたちまち、みんな「お母さん状態」になった。その後、馬場勇樹君(現、沖繩事業所所長)と堀幸晴君(石和事業所)を経て大牟田事業所に戻ってきた、とM君(退団)の男子3人。「海の風」のケアワーカーで堀君の妹、あゆみさんとT君(退団)が入り、次に入った守山君が、つぎつぎに友人を引っ張ってきた。今は看護学校に通っているSさん、湘南事業所に赴任した原口竜也君、小学校の同級生の大塚和貴君。そして、A君。同じようなB君もいます。「たしかに挨拶しない、話さない。でも、前の仕事先で人へ

た、よかった。院長先生は、ずっとがまんして見てくれたんだねと喜び合いました。A君の日々の成長を確認したい、これは蓮尾さんだけの仕事じゃあな。ここの作業をやったとけん」と支えてきた、現場の仲間

の思いが通じた瞬間でもあった。「おはようございます」「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた

「おはようございます」と、新本所長に訴えましたが、返ってきた



(上) 築130年、70坪、奥行き25間、落ち着く庭付き、茶室付の一軒家
(右) 見事な庭 (下) 赤塗りの天井。見上げるほどに高い。



富山・高岡

めの出資金も数百万円集め、当面は高岡デパートで支えることを合意していましたが、なにしろ文化財みたいな家です。

利用者が自立したらもう来れなくなることをゴッソリここに来れないの。さびしい」という高齢者の声にスツツたちも焦燥感にさいなまれていました。「自立になったら、行くところがなくなてま

気に読んで、家族である利用者到现在でおしまいといえるか！ 冗談ではない！ という思いが重いお尻をあけてくれました」と宮崎所長。

ひとのほつちで閉じ

高岡ぽぴー
宮崎弘美所長

一生懸命
るのが当たり前。

て戦争で大方も自分の実家のように気軽に来て話し合う、土間があつて、顔を見ながら交流して、それが地域づくりへの挑戦の第一歩と思ふんですよ。

「ほひ高岡（ツイン）はいつもういづれ。ティとは別に地域の人々が気軽にこられる居場所が欲しかったんです。みんなで2年近く探し続けていました」

き手た。

「それで、ここを見つけたんですよ。半紙に75程度に貸屋という文字と電話番号。たがそれだ

雑

美所長は、そういつて大きな笑顔で言葉を継ぎました。

土間があつて、格子があつて、お庭の雰囲気がよくて、見たとたんに「ここだ！これし

ちに大家さんに電話。
「来た人はみんな家族
とっています。です
から地域で最後まで暮

いですよ」と快諾。

高岡ばびーが悩んでいたのは、介護保険事業だとデイに通っていい

で残るのは
2割という
介護ビジネ
スの本を一



手拍子が響く

て、花笠、黒田節、野崎参りの曲当てクイズに笑いがはじます。

きたい」と話し、感動をよびました。

我が家みたい

富山・高岡のぼびーがデイスサービスとは別に高齢者の居場所「茶の間横町ぼびー」を11月26日に開設。文化財のような築130年の古民家。誰でも歓迎！元氣な高齢者がもっと元氣になる居場所として、スタートも上々です。



イラストは高岡ぼびーの看護師・
布野さん。(下) ゆったり居間でく
つろぐ利用者さんたち



の、「家賃はどれくらいおそるおそる「あ」と切り出すと、「今のデイの家賃は「10万円です」「じゃあ半年間は13万円。大切に使うてくれたら、その後は10万円ですぞうですか」との後は、大塚本返事に、即決。部長を気迫を込めて説得し、開所にこぎつけました。

「ふだん本を読まな

こもりがちの高齢者には、
も気軽に茶談話に来
てほしいと名前も「茶
の間横町ほびー」に。
空襲だったので、ス
タッフが総出で休日返
上の雑巾がけ。

開所式には、利用者や地域の方など、およそ80人が参加。

竹糸緑萌社中による

お昼を食べたあとは、「うちの実家」の河田達子さん（左）が講演。新簿で約3000人の会員組織、助け合いのしくみをくつ

開所式のお祝いは三味線演奏。手拍子が響く

【利用案内】▽月々金曜日(祝日も)▽10時～15時開所▽入会金3千円▽食事付き千円、食事なし五百円、入浴料二百円▽60歳以上誰でも歓迎。送迎無料。電話0766(25)8107

「これ運ぶよ、自分達
が食べるんだからと食
事の用意をし茶碗も運
っていました。

町内会長の金谷さん
ここにこんな施設が
できたのは心強い限り
です。町内会も応援し
ますのがんばってく
ださい。

大家の炭元さん
県会議員をやっていたので人の出入りが多い家でした。にぎやかな「茶の間」にしてくださる。

通っています。古民家を見学に来る人もいて、すこしずつ利用者の主体の居場所になっています。(本紙
川地)



した」と津幡さん。

いまは、デイサービスの利用者や地域の高齢者など7人ぐらいが

「これ運ぶよ、自分達
が食べるんだからと食
事の用意をし茶碗も運
っていました。

我が家みたい
数日後、停電があり
ました。スタッフは、
「電源はどこで
だ！」とあわてまし
が、利用者と近所
の方はゆったり中庭を眺
めながら、子ども時代
の話や、「こへ入って
みたかったのよ（むか
しは個人の家のなかで

お昼を食べたあと
は、うちの実家の河
田桂子さん（左）が
講演。新渡約3000
0人の会員組織、助け
合いのしくみをくっ
つたことや自らがガンと闘
いながら「最後の時」に
も、人の役に立つてい

... ..

永戸理事長の新年挨拶 2面
2012年は「国際協同組合年」 2面
夕張地福の3年、新たな決意 4面
地球温暖化とCOP15 5面

日本労協新聞

ICA・ワーカーズコープ

1/15

(2010年)

No.867

発行所 日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会
〒171-0014 東京都豊島区池袋3丁目1-2 光文社ビル6階
TEL 03(6907)8040 FAX 03(6907)8041
毎月 5日・15日・25日発行
会員外は1部158円 年5670円（税込7110円）
郵便振替 日本労働連合会振替会専用
東京 00170-8-186765
編集人 松沢裕夫

URL: http://www.roukyou.gr.jp E-mail: info@roukyou.gr.jp

地域の「ちょっと困った」支えたい 老人福祉センター利用者も担い手に

労協セ
ンター事業
泉
横
事
業
所

褥・障子張り講座から生活総合支援事業へ

横浜市区にある老人福祉センター「泉寿荘」は、労協センター事業団が指定管理者（5年間）として運営。今年で5年目を迎えました。「地域の財産を地域の人が支え、元気を発信する場所になりたい」と、利用者実行委員会を結成し、従来の貸し館業務にとまらず、利用者を主体にする取り組みを進めてきました。ぜひ「地域」や「地域」の交流を通じて、地域には「ちょっとと助けられれば自立できる高齢者も障がい者がいる」という地域の様子が現れてきました。昨年からは、さらに利用者とスタッフが地域の「ちょっと困った」を支えたいと、「褥・障子張り講座」を開講。4月からはヘルパー講座修了生や他の事業所とも協同して、営繕も含めた地域総合支援事業で仕事おこしをしていくと準備中です。（本紙 川地）

ヘルパー講座修了生も一緒に

横浜泉事業所の「1. 褥・障子、ハウスクリーニング2. 運動計画」には、ニソクなどの「生活総合支援事業」への挑戦が記されています。その事業の可能性が広がったのは、泉寿荘を会場に12月16日に終った「第1回褥張り・障子張り、褥張り、営繕」の会合で、



褥・障子張り講座の修了生。前列左から小山節子、山田道子、先生の高光志郎、諏訪問健一、後列左から須山裕見子所長、利用者実行委員会の竹田勝利委員長、小林正夫、大塚幸雄のみなさん

障子張り講座（11月）から全5回。参加費1000円、用具代別）を受講した利用者とスタッフの5人がいるからです。修了後、「これだけでは足りないのでもう一回やりたい」がります。

話し合いで見えてきた地域の「困った」

講座実施のきっかけは、利用者実行委員会も加わった一昨年暮れの大掃除でした。毎年スタッフだけで苦勞していたのですが、利用者が有志が「自分たちで、まっすぐに切っただけで細か



「自分たちで、まっすぐに切っただけで細か

の声に呼ばれて、2月17日からは第2回講座を開講。さらに研修を積み、ヘルパー講座の修了生や他の事業所の仲間と一緒、4月からの生活総合支援事業の準備を進めています。

泉寿荘スタッフの諏訪問健一さんは、20数年建設現場などの仕事に携わってきま



利用者も労協連30周年集会などに参加

利用者をお客様にしたい、元気な高齢者がもっと元気になる拠点に、利用者主体の運営を貫いてきました。それが支えたスタッフの思いが実って



今労協連30周年に参加した森要さん（左）と山田道子さん（右）は、泉寿荘の職員として働いていて、泉寿荘の運営に力を入れている。山田さんは泉寿荘30周年集会にも参加

と人が手をとりあうつながりに変えたいといけない。泉寿荘に来ると友達がいるし、ほっとする。こんな雰囲気のところを地域にいつくつきたい」と話してくれました。

誰でも参加できる社会連帯で

泉寿荘では、センター事業団で運営するようになつてから結成した利用者実行委員会が主幹で、地域の「困った」が見えてきました。

「高齢になると、庭の草むしりや障子張りも無理になる」「すし手助けしたら、自立できる人がたくさんいる」「地域の困ったを仕事にしたら喜ばれる

「自分も元気になる」「これは高齢者の智慧と経験を生かせる仕事になる」「少しづつは、寝て、自分たちで生み出して

「利用者のみなさんとお祭りや自主講座を通じて歌って踊って、お世話しただけではない信頼関係ができた。指定管理者を地域の拠点と位置づけられ、集まる人たちの力を活かせる。誰でも参加できる社会連帯活動があったから、利用者が労働とも交流できた。それと結ばれ、可能性も豊かに広がっています。指定管理者を継続し、見えてきた地域の課題を仕事おこしにつなげる1・2・3運動にしたい」と、須山裕見子所長は話しています。

